

興行分析 9 月度レポート

◆————◆
< 2011 年 10 月 15 日 >

中小のヒットはあるものの、
前年比は依然 2 割減のまま

KRI 

キネマ旬報映画総合研究所

興行分析 9月度レポート

【前年同月比で興収78.4%、動員80.8%。2割減の基調から回復の目処立たず】

9月の興行は、東京ロードショー劇場78館の集計では、総動員数が66万5590人、総興収が9億3367万円となり、前年同月（81館）比で動員数80.8%、興収78.4%と、7月、8月の基調をそのままに推移。昨年の9月は「THE LAST MESSAGE 海猿」（最終興収80億4000万円）、「バイオハザードIV アフターライフ」（同47億円）など、年間ランキングの上位に入る邦洋のビッグヒットが相次いだ。今年も、興収20億円超見込みの「アンフェア the answer」が筆頭となる状況で、前年比2割減の流れからいまだ回復の目処は立たない。

【月前半は、10億円台を狙えるヒット作が2作品にとどまる】

週ごとに9月の興行を振り返ると、まず、1週目に、木曜初日で「ライファーいのちをつなぐ物語ー」（エイベックス）が登場。310スクリーンで公開し、初日4日間で動員29万9391人、興収3億4951万円、土日2日間では、動員18万1760人、興収2億2688万円と好スタートを切った。「アース」（08年、最終興収24億円）、「オーシャンズ」（10年、同25億円）に続くネイチャー・ドキュメンタリーとして両作が評価基準となるが、初週の土日2日間の比較では、「アース」が275スクリーンで動員28万5374人、興収3億5386万円、「オーシャンズ」が302スクリーンで動員28万人、興収3億3800万円と、両作の70%弱で10億円台後半を見込むかたちでスタート。その後、3週目に入って動員に陰りが差し、最終興収は12～13億円にとどまりそうな気配だ。続く2週目には、「探偵はBARにいる」（東映）が公開。251スクリーンで公開され、初日2日間で動員12万8800人、興収1億7021万円という、アニメ、特撮以外の一般劇映画としては東映では久しぶりの好スタート。若年から中高年まで幅広い年代の女性を動員しており、また北海道の興収シェアが8%と高いのも、主演の大泉洋人気が集客の原動力になっていることを裏付けている。最終興収10億円が射程圏内だ。

ほか、月前半では、「クマのプーさん」（ディズニー）が150スクリーンで公開、初日2日間で6万6372人、興収8216万円、スクリーン・アベレージ約55万円、「劇場版テニスの王子様〜」（松竹）が28スクリーン、2万8227人、3943万円、約141万円と効率の良いスタート。一方、海外では人気の高い妖精キャラクターを3Dで描いた心温まるアニメ「スマーフ」（東宝東和）は235スクリーンで公開され、初日3日間で動員5万6060人、興収7637万円、スクリーン・アベレージ約32万円、DCコミックのヒーローもの「グリーン・ランタン」（ワーナー）は152スクリーン、2万6848人、4245万円、約28万円と、ともに苦戦。目標興収に対して公開規模をある程度広げなければならない現実が、市場のニーズと合致せず、効率を下げている。

【月後半には、東宝が劇映画では5ヵ月ぶりの20億円超を見込む作品を連打】

3連休が続く9月後半には、邦洋の話題作が集中した。3週目には「アンフェア the answer」（東宝）と「世界侵略：ロサンゼルス決戦」（ソニー）が同日公開となったが、明暗が分かれた。

「アンフェア〜」は、テレビドラマの人気を受けて前作が2007年3月に公開、興収27億円超の大ヒットとなったが、本作も4年半のブランクを感じさせない安定した興行を見せている。368スクリーンで公開され、初日2日間で動員23万6000人、興収3億1300万円、スクリーン・アベレージ85万円という好成績を収め、その後もフジテレビの大量パブリシティを受けて動員を伸

ばし、20億円超えがほぼ見えてきた。東宝配給のアニメを除く劇映画では、「SP革命篇」「GANTZ PERFECT ANSWER」以来、「岳ーガクー」「プリンセス トヨトミ」「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」「阪急電車 片道15分の奇跡」「星守る犬」「アンダルシア～女神の報復」「ロック ～わんこの島～」「神様のカルテ」と8作品連続で超えられなかった20億円の壁を、5ヵ月ぶりにようやく打ち破った。

一方、「世界侵略～」は、333スクリーンで公開され、初日3日間で13万8000人、興収1億7400万円というスタート。「第9地区」(10年、最終興収8億3000万円)と比較すると、204スクリーン、初日2日間で動員12万5000人、興収1億6000万円と、公開規模、集計日数に差はあるもののほぼ同成績で、10億円の大台に乗るには厳しい状況といえそうだ。

そして、4週目には、深夜ドラマでカルト的な人気を博した「モテキ」(東宝)とNHKながらスキャンダラスな不倫愛が大きな話題を呼んだ「セカンド・バージン」(松竹)が登場。「モテキ」は276スクリーンで公開され、初日3日間で動員28万4159人、興収3億8896万円、スクリーン・アベレージ89万円という絶好のスタートとなり、その後も公開18日間で約100万人を動員、13億円を超えるなど好調を維持し、「アンフェア～」に続き20億円超えがほぼ見えてきた。本作は興行成績もさることながら、ふだん劇場にあまり足を運ばない若年層を集めてのヒットと、市場にとっての意義も大きい。東宝は、2本連続での劇映画の20億円超えで、良い流れができてきた。これに対し、「セカンド・バージン」は、225スクリーンで公開され、初日3日間で動員6万9791人、興収8723万円、スクリーン・アベレージ23万円という大不振。ドラマ版が社会現象化するほどの人気だっただけに興行界の期待も大きかったが、週末ランキングでは初登場にして7位に。同じく人気テレビドラマの映画化ながら「モテキ」とは著しく差が開いた。

【3D上映は、ユーザーにとっては既に、字幕、吹き替えと同様の選択肢に】

ほか、9月後半には、「スパイ・キッズ4D」(松竹＝アスミック)、「ラビット・ホラー3D」(アスミック)と、3D作品が続いたが、前者は218スクリーンで公開され、初日2日間で動員7万4000人、興収1億900万円、スクリーン・アベレージ50万3000円と、シリーズものの安定感を見せたが、後者は109スクリーン、1万1600人、1900万円、17万9000円と厳しいスタート。ユーザーにとって3Dは既に、字幕、吹き替えと同様に選択肢のひとつであり、圧倒的な強いひきではなくなっている。限られた層を狙う作品であるならば、敢えて3D上映を選択しないという方法もあるのではないだろうか。

東宝の劇映画2作連続20億円超えという朗報はあるものの、市場全体としては特大ヒットに恵まれず、9月も回復に向かう気配はなかった。次月は、洋画で「ワイルド・スピード MEGA MAX」(東宝東和)、「猿の惑星：創世記」(FOX)などの娯楽大作が続き、邦画でも「一命」(松竹)、「ステキな金縛り」(東宝)など動員を伸ばせる作品が控えている。年末に向けて勢いづくためにも、10月の興行回復に期待したい。